



対 談

尾本 恵市

東京大学・名誉教授
国際日本文化研究センター・名誉教授

×

川田 順造

神奈川大学大学院歴史民俗資料科学研究科・教授

感性のモデル化 人類学の立場から

クラスター分析と徴候分析

川田 尾本さんは、文化をもった動物としてのヒトという観点から、文化人類学と自然人類学の統合を説いておられ、私も“文化は文化より”という文化至上主義の解釈に反対で、ヒトの生物としての基盤が、文化の形成にとって重要だと考えています。私も尾本さんと同じ生物系(理科 類)出身で、学部、大学院でも同世代の総合人類学の学問環境で育ち、新エイブ会の構想にも賛成です(1)。COEで私の属している第2班の中心課題は身体技法と感性の資料化で、この領域でこそまさに文化の生物的基盤が問われるのです。身体技法は私の長年の関心で、すでに龐大といってよい研究データの蓄積があり、海外での発表も多くしてきましたし、自然人類学との協同という点でも、自然人類学の学会や学会誌での発表、COEの共同研究員もお願いしている芦澤玖美さんなど、キネシオロジー(生体運動学)の専門家とのアフリカや日本での共同調査もしてきました。感性の領域で、聴覚に関しては音文化(sound culture)という概念を私は提唱して、言語と音楽、声と器音などの境界を取り払って、音のコミュニケーションの総体の社会・文化的な意味や聴覚以外の視覚・触覚などとの共感覚(synesthesia)の問題を追求し、COE以前に多くの成果を内外で発表しています。けれどもそれ以外の感性の文化において重要な領域に、嗅覚や味覚があり、COEの研究課題として探求が始まったところです。

日本の香道には前から興味をもっていましたし、匂い

が喚起するものについてのテストを、調香師の使うサンプルで、日本やアフリカの被験者に試みたこともあります。匂いの喚起力は強烈だが、非分節的で、個人差や状況による変差がきわめて大きい。それを集合的な“文化”の問題としてどのように取り上げていったらいいか、その方法で迷うところが多く、この機会に尾本さんにご意見を伺いたいです。

一つは社会史的なアプローチで、フランスのアラン・コルバンやジョルジュ・ヴィガレロなどの先駆的な業績があります。都市の悪臭とか人体の潔不潔への対応の問題として、歴史的に研究する方向です。これら先人の研究を批判的に検討し、それと比較できる形で日本やアフリカなど、他の社会について探求することも可能でしょう。ただ社会史的研究は、ある社会のある時代の嗅覚の特殊な側面を対象にしているので、それらの研究で問題になり得たことが、他の社会では存在しないこともあり、広く人類文化について比較できるとは限らないといえます。第二の方法は、ある文化のもつ匂いの認識世界をモデル(最頻的)な形で把握しようとするもので、認知人類学の一分野ということになるでしょう。匂いのサンプルを一文化ごとにある数の被験者に嗅いで分類してもらい、結果をクラスター分析して、その文化の嗅覚認知の特徴を把握する。これは認知人類学で色彩についても行われた方法です。ただ、匂いのような不安定な事象で、母集団に対して被験者のサンプル数も少なく年齢・職業にもばらつきがある場合、そこから何か有効な結果が導

き出せるだろうか、クラスター分析というデータ処理の手法に関しては精密らしい装いはしていますが、そこにかえって陥穽がありはしないか、認知人類学の研究者とはこれまでも接触が多かったのですが、クラスター分析を匂いの領域に適用することには、私は疑問をもってしまふのです。

文化とパーソナリティ研究がまだ流行していた1961年、私は人類学の院生でしたが、岩手県の農村でTATとかロールシャッハなどのプロジェクトヴ・テストによって、村のモーダル・パーソナリティ、つまり集団の最頻的パーソナリティを求めようとした、その領域の最先端の専門家二人の指導した調査に参加したことがあります。プロジェクトヴ・メソッドは臨床的には有効だと思いますが、集団の最頻的パーソナリティを求めるのには無理があると感じました。その試みは完全に失敗したのですが、比較的少数の個人のテスト結果のクラスター分析から、匂いの認知についての集団のモーダルな性格を求めようとする方法とも共通する問題を含んでいると思います。こうした方法の有効性について、人類遺伝学分野でクラスター分析をお使いになった尾本さんに、意見を伺いたいです。

尾本 私どものやっているクラスター分析では、はっきりと尺度の定義がなされています。まず遺伝子の違いを集団間で測る「遺伝距離」が、集団遺伝学で定義されているわけで、それに基づいてクラスター分析をしている。ですから、それぞれの枝の長さとか、分岐年代の推定には理論的な根拠があるわけです。ところが、今うかがった、においに関する測定値を仮にクラスター分析する場合、数値分類ですから当然いくらでも出来るわけです。しかし、尺度の単位、原理がはっきりしないものでいくら分類してみても、それは単なる機械的な分類に過ぎないわけで、科学的な意味はないのではないかと。

その意味では、私は川田さんの「文化の三角測量」のように、日本とフランスとアフリカという三つの地域集団で、さまざまな現象を比較していく方がむしろ実りが大きいのではないかと思います。

川田 私も第三の方法として、徴候分析(symptomatic analysis)とでもいうか、感性の領域でも、ある文化の例えば匂いのとらえ方を集約して示している、「徴候」とみなせるような事象の掘り下げが有効ではないかと考えています。研究者の主観に片寄らないために、その事象

をその文化内の他の側面との関係で検討して意味の位置づけをした上で、私の提唱してきた文化の三角測量という、断絶のなかの原理的な比較から理念型としてのモデルを作っていくという方法を模索しています。まだあくまで模索の段階に過ぎませんが。

日本では香道をはじめ焚香が好まれたのに、体に塗る香料は明治以前にはなく、フランスでは煙よりも体に塗る香水が発達した。西アフリカでは、アカテツ科の野生樹でバターの木とも呼ばれる「カリテ」(*Butyrospermum paradoxum subsp. parkii* (G.DON) HEPPEL)の種子からとるシア・バターなどの植物油を全身に塗る一方、催淫効果をねらった焚香が盛んです。なぜそうなったのかを、その事象をめぐる言語表現や慣行、俗信などを手がかりに文化内の、イーミックに分析し、同時に他の二文化との対比で、文化間的、エティックに対応やねじれを考えて、それぞれのモデルを作っては壊してみるという試行錯誤が大事だと思います。私が「技術文化」(technological culture)について行ったように(2)日本、フランス、アフリカなどという固有名詞はつけず、モデルAとかモデルB、Cなどとした「発見に資する(heuristic)」理念型を作って、それをもとに他の文化についても特徴を見てゆく。もちろんA、B、C以外にもD、E、Fもあるだろうし、A、B、CのサブタイプとしてA1、A2、A3というのものもあるかもしれません。そういう、文化を徴候から分析していく上での手がかりとしては、匂いとか味の領域は、難しいが豊饒な領域ではないかと思うのです。

味覚を中心に、嗅覚、視覚も含まれる領域として、フランスのブドウ酒の評価法に私は興味があります。その大きな特徴は、明確な定義を伴った言語化が進められていることです。商品としての国際的な流通の歴史が非常に古いために、言語で味の評価を明確に規定する必要があったのでしょう。グラスに注ぐ時の音など聴覚まで含めた総合評価がありますが、ソムリエの国際コンクールで日本人が一所懸命に勉強して一位になったりもできるのは、ブドウ酒をめぐる感性の領域における評定が、言語化された一つの体系になっているからです。

尾本 クラスター分析とは別に、統計学でよく使う方法として、主成分分析があります。例えば、形態学には私が言ったような意味での遺伝距離はありません。人骨を測ってクラスター分析をしています。あれには実をいうと相当問題があります。尺度の根拠がない、単なる量



対談

に過ぎないわけです。主成分分析では、わかりやすく言えば、頭の長さや幅を縦軸と横軸にとり、サンプルの相対的な位置を二次平面の上で示すのです。これは直感とも一致します。よくコーヒーの味で、甘み・苦み・酸っぱさの程度を三角形の中で分析して、モカならこの産地だとか、コロンビアならここだとか特定しているが、あれに似ています。何か基準になるもの、三角形でもいいし、縦軸・横軸でもいいし、恣意的ではいけません、そういう二次平面の上にスポットしていく方法がむしろ役に立つのではないかと思います。

匂いの文化

川田 南フランスの中世都市グラスは世界の香水の一大中心地で、有名な調香師のラボが集まっているところです。そこでミシェル・ルントニツカという親の代からの世界的な調香師で、視覚の領域などとの共感覚の試みにも挑戦している、いま注目されている調香師のラボを訪ねてお話を聞きました。調香師の親に訓練されて育ったルントニツカさんは、三千くらいの匂いを嗅ぎ分けられるそうです。彼に言わせるとこれは訓練の問題であって、音とか色については皆小学校から教育を受けるが、匂いについての教育は何もない。調香師の学校で訓練すれば誰でも二千ぐらいい嗅ぎ分けられるようになると思います。感性というのは訓練と結びついている面があるのかもしれない。ルントニツカさんのお話で興味深かったのは、共感覚、領域の違う感覚の結びつきです。三千という匂いをどうやってマークするのかと聞きましたら、自分の過去の体験のなかの特定の風景の記憶と結びつけ



川田 順造

神奈川県立歴史民俗資料学研究所・教授

てしるしづけるのだそうです。

日本の芝居の下座囃子に、大太鼓の雪音というのがあります。ばちに布をまいて雪がどんどん降ってくる場面で、鈍い音をドンドン、ドンドンとゆるく打つ。雪が降るのに音はしませんが、舞台上に雪が降る情景の視覚的印象が音で補われる。日本の風鈴も音を聞いて涼しくなろうという装置ですが、異なる感覚領域のあいだの連合は、いろいろな面に表れています。

最近フランスの香水業界で、緑茶の匂いが流行しています。それと日本人にとってはノスタルジックなご飯の炊ける甘い匂いも。慣れ親しんだものへの安心感のある愛着と、変わったものの刺激を求める好奇の両側面は、味覚や聴覚においてもですが、感性の領域で常に背中合わせになっていると思います。

尾本 フランスでは香水を体につけ、日本では香をたく。そこにははっきりした原因がある。いわゆる体臭は、明らかにヨーロッパ人種は強いわけで、彼らは体臭を消すということに懸命です。それに対して日本人は体臭がない。東北アジア人は体臭がないのです。ところが、鮎など魚を焼いたりするから部屋が臭い。においというものは、本人は気づかないですが、外から入ってきた人にはわかる。においの文化というのは、自分のためではなく他人を迎えるためのものなのです。お客さんに不愉快な思いをさせないためなのです。これは合理的な一種の文化適応だと思います。

川田 昔パリの屋根裏部屋で自炊していた時、出窓で鰯を焼いたらすごい苦情が出た(笑) 日本では焼鳥屋や鰻屋は、煙と匂いで客を引き寄せるといいますが。

尾本 焼くのは、多分風通しのいいところで焼くのだからうけど、焼かなくてもなんとなく日本の家は臭いのです。トイレも汲み取り式だったから。香も元はトイレのにおい消しと思ったのですけどね。においを科学的に測定して、数値で表すととなるとなかなか難しい。

川田 感性の領域で重要だと思うのは、反射的な忌避感覚、とっさに何を気持ち悪いと思うかです。日本人は風呂に家族が交代で入るのは平気だけど、西洋人には出来ない。日本人は西洋式の個人浴槽で自分の体を洗い、そのまま拭いてあがるのは気持ち悪いと思う。どちらがキタナイかというのは文化的な判断で、どちらの方が黴菌が多いかという問題ではありません。スリッパも同様で、廊下は歩くけれど畳の上にあがると気持ち悪いと思

う。まして、布団、とくに寝具の布団に上がるなんてとんでもないと思う。けれども裸足とか足袋で廊下を歩き、布団が上がっても汚いとは思わない。明治以降導入されたスリッパが、それ以前にはなかった住生活の床面の区別に対応するものとして、日本人の潔不潔感に新しい局面を生み出し、どこの家にも何足も置いてあるという、日本にしか見られない異様な発達をしたわけです。

尾本 履物ということで、土足という概念になってしまう。私の家でも、トイレのスリッパを履いてそこら辺を歩いていると、家内にもすごく怒られますね(笑)

川田 完全に土足というわけでもなく、中間土足。病院とか学校の上履きなど。家によっては、台所やトイレに入るとまた別のスリッパに履き替えたりする。

リズム感 生まれか育ちか

川田 遺伝子レベルの問題かどうかで興味があるのは、リズム感覚です。これは文化だけの問題ではないのではありませんか。ブラジルで感じたのですが、インディオは我々と祖先が共通のせいか二拍子系の踊りで、私でも楽に踊りの輪に入れます。けれども、アフロ系のダンスとなるとポリリズムで、これは生まれ直さないとだめだという気持ちになる。アフリカで小さい子どもが二、三人で空き缶を棒で叩いて遊んでいても、申し合わせた訳でもないだろうに、絶対に同じリズムでは叩かない。それぞれに違うリズムをからみ合わせて楽しむ。そのポリリズム感覚は、我々二拍子系ヤマト民族から見ると高級なものに



ヨルバの村オキニ(ナイジェリア)で
1989年11月、川田撮影

思えますが、アフリカの子どもたちにしてみれば、ポリリズムが基本というか、当たり前のもなのかも知れません。赤ん坊の時母親の背中であるいは胎内でリズムを覚えるのだとアフリカの人たち



尾本 恵市

東京大学・名誉教授
国際日本文化研究センター・名誉教授

は言います。

尾本 多分遺伝的な脳の運動分野の問題、運動と音との関連です。リズム感覚が、脳の中のどこかで発達している人と、そうでない人がいる。脳の問題になると、生まれか育ちか、natureかnurtureか非常に難しい。遺伝子でなくても、母親の胎内にいる時に刷り込まれたのかも知れない。ローレンツが言うとおり、幼児期のある非常に敏感な時期に、ある外界の刺激が入ると、遺伝子がすでに存在していなければ駄目ですが、リズム感覚が開発される。

川田 小島美子さんは、日本で水田稲作民的生活様式が、強弱感のない二拍子を基本とするリズムを規定してきた一方で、沖縄の波乗りリズムのように、一拍ごとに上下にスウィングする海洋民のリズムや、津軽三味線のような、東北の山地狩猟焼畑民の強くはずむビート感をもったリズム、これに騎馬の習慣が加わった、強弱二拍子のためと弾みをもったリズムが認められることを指摘していますね。基本的生業・生活形態がリズム感を規定するというのは、藤井知昭さん、故小泉文夫さんの騎馬民族三拍子説もそうです。堀内勝さんは、アラブのリズムは駱駝の歩き方のリズムが基本だという立場で、面白い分析をしています。ただ、馬も駱駝も家畜ですから、人間の側からの影響も強いはずですよ。

尾本 子供の時の刺激ですよ。実際に子供の周辺でどうい音か鳴っているかは測定できるわけです。川田さんの三角測量、日本とフランスと西アフリカというのは、場所がとてもいいと思う。それぞれ場所が独特だね。中



対談

国、インドはどうだとか言い出すときりがありません。川田さんの三角測量というのは一つの突破口を開いたと高く評価しています。2点では駄目で3点というのがポイントだと思います。

身体技法の背景

川田 身体技法、文化によって条件付けられた身体の使い方について、アフリカと日本でキネシオロジーの人たちと共同研究をしてきましたが、この領域はまさに自然人類学と文化人類学の接点です。報告書が出たばかりの芦澤さんを代表者とする国内科研では、日本の伝統的な生業に結びついた身体技法として、山の傾斜地での荷物の背負い方、舟の櫓こぎ、田圃での前屈作業の三つを取り上げました。山仕事、沿岸・近海漁業、水田稲作は日本人の基本的な生業でした。櫓こぎは腕力はあまり必要とせず、腰を使う。背負い運搬具については、地方差もあり簡単に言えませんが、肩や腕に力点のある西洋に比べれば腰で支える。これらは胴長で四肢の短い日本人の体形に合った身体の使い方ですが、稲作の前屈作業は、日本人には不向きな姿勢だと思います。

以前、アフリカで水田の草取りのビデオを撮ったことがあります。日本だと少しやったら腰を伸ばしてやれやれとなりますが、深前屈が日常の身体技法としても楽な姿勢である西アフリカ女性の共同労働では、皆楽しそうに歌を歌ったり大声でおしゃべりをしながら、深前屈のまま全然起き上がらないのに驚きました。寒冷地の東北から北海道まで新田開発をやり、前屈が重要な水田の作業は日本人の体に不向きだったのに、無理をして日本人が米に執着してきたのはなぜだろうかと改めて思います。尾本 無理を強いてというのは、他にもある。僕が一つ注目しているのは頭上運搬です。縄文時代には間違いなくあったはずですが。今でも沖縄に行くとやっています。大原女が頭の上に載せているのはありますが、なぜ、あの頭上運搬が日本の主流ではなくなったか疑問です。川田 フランスでも田舎では随分あったけど、今はなくなりました。

尾本 背負子というものが出来てから、頭上運搬をやる必要がなくなったのではないのですか？

川田 頭上運搬が今もさかんなアフリカには背負子はありません。日本でも背負子の型は、東西で分かれます。西では、重心が非常に低いのです。ヨーロッパでは背負い

具は重心が高く作られていて、首の後ろと肩で荷の重みを支える。日本では腰、仙骨で支える。ところが、東北のとくに山地では背負い具の重心が上にいく傾向があります。初磨り臼も、第二班の河野通明さんが詳しい調査をされてCOEの年報にも書いておられますが、西日本では低くて低座位で摺るのですが、東北では高く、立って操作する。単なる地域差ではなく、古い時代からの住民の系譜や体形の違いとの関係も考えなければなりません。私も前にビデオでとったことのある、岩手県北の山地の踏み鋤とアイヌの踏み鋤はよく似ています。一本の木の幹と枝で出来ていて、独特の体の使い方をします。尾本 踏み鋤が縄文時代の遺跡から出てくると面白いですね。縄文時代の木材で用途がわからないものがたくさんある。人類学では、いろいろな雑学が役に立つのです。川田 これも徴候的なものですが、日本では本腰を入れて仕事にかかると言いますが、フランス語では「腕まくりをする」(retrousser ses manches)、英語でもroll up one's sleeveと言うのです。また、「あぐら胡坐をかく」を、フランス語では「仕立屋風に座る」(s'asseoir en tailleur)と言いますが、英語でもそうです(to sit in tailor's fashion)。19世紀前半の北斎漫画にある諸職図では、みな尻を地面か床面につけて作業している。同時代のフランスのエピナール民衆版画の諸職図では、職人の作業姿勢は、立つか、高い座位です。ただ、仕立屋だけは胡坐をかいて仕事をしていて、胡坐が職業と結びついている。高麗・李朝の朝鮮ではヤンバン(両班)坐りとも言ったそうです。特権の官吏の文机に向かったライフスタイルと結びついていたのでしょう。胡坐は勿論服装とも関係があって、インドでは、女性でも裳裾が長いから胡坐をかきますね。

尾本 腰はおもしろいですね。腰が90度曲がるのは、刷り込みじゃなく遺伝的なものではないでしょうか。

人類進化と言語の関係

川田 言語くらい、ヒトの文化にとって基本的重要性をもつものでありながら、生物的な身体や身体技法と結びついたものはないでしょう。発声器官と構音器官の協働によって、声の合図ではない分節的な発音が可能になる。進化の過程で直立二足歩行で喉頭が下り、構音器官が発達したといわれます。ヘッケルの「個体発生は系統発生を短縮して示す」という言葉は有名ですが、人間の赤ん坊が

生後一年くらいで直立二足歩行をするようになると、分節的な言葉を話すようになる。これは声帯が下がり、構音器官が発達してくることに関係がある。それまではマンマなど両唇音だけです。霊長類研究所の松沢哲郎さんにいただいた論文で学んだのですが、チンパンジーの幼児期にも、喉頭の降下が見られ、この降下はhomonidに固有の進化の結果ではなく、一部はhominoidの進化過程にも含まれているのではないかと考えられるそうです。チンパンジーと人間とのコミュニケーションは、かなりの程度可能だけれど、チンパンジーには二重分節的な言語は話せない。

尾本 確かに声帯が下がると、持続しているいろいろな種類の音が出せるようになります。猿やチンパンジーでは、叫び声です。それに対してヒトの場合では、例えば、あ～、長く母音を伸ばして、口全体が共鳴して発音します。ただ、分節化とは要するに、概念を繋げている複雑な表現をすることです。音声学的な問題よりもむしろ思考形態の変化の方が重要ではないかと思えます。赤ちゃんが立って歩くようになると、キャッキヤ、キャッキヤ言っているのに比べて、ちゃんと言葉が出せるということです。差別的にとられても困るのですが、聾啞の人の赤ちゃん、つまり全然声が聞こえない人の子の言語の発達は今どのように考えられているのですか、やはり手話で教えるのですか？

川田 ヘレン・ケラーの例もありますからね。

尾本 今までの言語発達理論というのはいわゆる音声伝達ということに縛られすぎた。耳の聞こえない子供も手話で概念を複雑に繋げていけるということが大事だと思うのです。声帯は関係ないですよ。

川田 以前パリであった霊長類の国際学会で、ガードナー夫妻がチンパンジーとコミュニケーションする実験の記録映画を見たことがあります。ですが、あれはチンパンジーに人間の側から伝達方法を仕込んでいるだけで、曲芸ではないかと思ったのです。

尾本 チンパンジーの場合は同じ曲芸でも程度がすごいのです。チンパンジーに言語を教えることで古典的に有名なのはガードナーとプリマックです。チンパンジーのワッシュとサラは女の子です。松沢さんのアイちゃんも女の子でしょう。あのようなシンボリックな考えかたは、女性の方が発達しているのではないかと思います。チン

パンジーの文化が話題になりますが、私は、概念化思考に基づいた言語と、言語に基づいた概念化思考というヒトを特徴付ける文化は切っても切り離せないと思います。

500万年の人類進化のなかで、概念化思考とか、価値判断が明確に文化の基盤になったのは、比較的最近ではないかと思うのです。いわゆるホモ・サピエンスになってからではないか。言語があったかどうかと言えば、それは確かにあった。同じかたちの石器などをみんなが作ることは、当然ある抽象化された概念を共有しているからです。言語がなければ考えられません。ホモ・サピエンスの段階になってから言語はすごく複雑化したのではないかと考えられる。

一つ言えるのは、言語という問題は遺伝子と違って、一種の文化です。能力は遺伝ですが、言語そのものは文化です。石器や習慣の多様性がある以上、言語にも多様性を認めてもよい。極端な話、ニューギニアの高地へ行くと、明らかに生物学的には同じヒトたちのあいだで全然言葉が通じません。遺伝子の分化は何万年経たないと起こりませんが、言語は数百年で起こる。

川田 言語能力は先天的だが、ある言語の習得と運用は完全に後天的な学習によるものですね。各言語に固有の、調音器官のコーディネーションと運動連鎖の総体である調音基底という身体技法を通じて発話できるわけですから、調音基底の刷り込みがないと、その言語の発音がスムーズに出来ないということになる。

尾本 まさに言語というのは、親や周りがしゃべっているのを聞いて覚えていくわけです。年取ってからでは駄目で、子供のある一時期に刷り込みと同じように、いろんな言葉がどんどん入ってくる。文字のある文明とない文明とがある。それは、言語に相当、影響しますか？

川田 尾本さんの定義だと、文明と文字は結びついている。中国では漢字が共通しますが、話したら全然通じない方言がたくさんある。日本語もそうですが、文字を習うと言語は画一化に向かうのです。『サバンナの音の世界』という私が録音編集したレコードアルバム（後にカセット・ブック）に、子どもたちの歌とかお話も入っています。何人もの人がそれを聞いて、声がきれいだと感心した。文字教育によって規格化されていない言葉は、生き生きと、アナーキーな個性に輝いています。その代わり共通語としての通用性は低い。これが画一化していくと、NHKのアナウンサーのような話し方になるわけです。



対談

尾本 アイヌ語も文字がないから、北海道でも方言がたくさんある。記録に残っているアイヌ語というのは一つしかありませんが、ユーカラもお互いに全部通じるのですかね、旭川とか、場所によってどうなのでしょう？

川田 「通じる」ということの意味が問題ですが、節をつけたり拍律を整えた語り物は、日常言語ではばらばらな言葉の韻律的特徴が様式化されて、丸暗記しやすくなり、文字化されたテキストに近い性質をもってくるということがあります。歌の特徴の一つは、言葉の意味がわからなくても歌えることです。また歌われる文句や様式化された語りは、細部の意味の理解・不理解を超えて聞き手に受け入れられる面がある。旅の贅女さんの歌や琵琶法師の語りなどもそうです。

尾本 言語と音楽の中間的な問題として、歌の問題があります。フィリピンの先住民の例ですと、自分たちが神様の山だと思っている山に向かって、「なんでそんなことをして、みんなを困らせるんですか」と大きな声で朗読する、呼びかけるわけです。一種の節をつけて、朗々たる声で。実は僕はそれを、案外スペイン統治時代あたりにやっていたのを真似しているのではないかと思ったのですが、もともとオリジナルなものでしょうか？

川田 外部世界との関係での歌という点で、西アフリカは興味深いところです。地中海世界と繋がるサハラ砂漠、そこはイスラーム・アラブとの接触の場であり、真ん中がサバンナ、南に行くと海岸の森林地帯で、ギニア湾、大西洋を経てヨーロッパと15世紀半ばから交渉があった。北のサハラやその南縁のサバンナでは、アラブ世界に特徴的なメリスマ唱法、つまり言語音の1モーラに3つか4つの異なる高さの音をあてる。グレゴリオ聖歌やイスラームのジクルでもそうです。けれども少し南のモシ社会にはメリスマ唱法はありません。そして声の高さの複合ということに関してはユニゾンなのです。ところが南の海岸へ行くと、ポリフォニック、多声になります。海岸地帯も東のナイジェリア東部の方へ行くと、雑然としたトーン・クラスターからポリフォニー、異なる高さの声を調和的に組み合わせるものにだんだん変わってゆく。椅子文化の発達、ベニン王国の平面青銅板図像のような二次元表象の存在などと共に、ヨーロッパとの接触による影響の可能性を、感性の領域で複合的に検討してゆく必要があると思います。

尾本 中国の少数民族の間には有名な歌垣があります。

恋人同士が歌を大きな声で歌います。場所が大体山岳地帯です。声を通り、遠くまで聞こえます。だから多分、サバンナとかでは、出来ないのではないかな？遠くにいる誰かに何か伝えたいというのが、言語の一つの重要な役割だったと思うのです。

川田 裏声もそうですね。ハワイの洋上島社会の裏声、アルプスの山のヨーデル、中部アフリカの森林住民の裏声。日本人の伝統的な発声も、男も甲高い。馬追い歌とか木遣り歌は、山林にこだまする大きな甲高い声です。

「人類文化研究のための非文字資料の体系化」について

尾本 従来人類学だと二足直立歩行などサルから進化してきた全ての現象が大事ですが、私が主張するヒト学というのは、現代文明下でのホモサピエンスという動物、これが独特の存在であるということから出発します。ですから、現代のさまざまな問題との接点を絶えず認識する。K.ローレンツの『文明化した人類の八つの大罪』や、萱野茂さんの「アイヌは、自然の利子で食べさせてもらっていた。そこに、和人がやってきて、元本を食い尽くしてしまった」というのはよい比喻です。

文明化した人類の八つの大罪 (K.ローレンツ・1973)

- 1 人口過剰...社会的接触の過多から攻撃性がたかまる
- 2 自然破壊...資源の枯渇、自然に対する畏敬の念の喪失
- 3 競争の激化...競争手段としての技術の発達、国家はあたかも異なる生物種のように殺し合う
- 4 感性・情熱の萎縮...科学技術の過大な進歩によって虚弱化
- 5 遺伝的衰弱...自然淘汰の消滅による
- 6 伝統の破壊...急激な価値判断の変化、世代間の対立
- 7 教化...教育・マスコミによって画一化
- 8 軍拡・核兵器

川田 人類という視野が大切だと思うのは、自分たちの生活や文化の中だけで考えていて当たり前だ、あるいは、特殊だと思っていることが、相対化されるということです。それから生物の一つの種としての人間という観点、種間的 (inter-specific) な位置付けで人類の問題を考えたい。音文化や身体技法を取り上げる時も、文化的 (intra-cultural) の対極に種間的を私は考えています。音文化で言えば、音とそれが表す意味との関係が重要な

切り口になります。私がよく使う八角形の一番右端に置く種間的な声というのは、生物の根源的な欲求である個体の存続と種の存続にとっての危機に発する、断末魔の叫びとか同様に警戒を呼びかける声、これは、種が異なってもかなりの程度音の意味が分かり合える。それに対して、歓びの表現であるとか、擬音語・擬声語とかになると、音と意味の関係が動機付けられている度合いが大きいです。種内の(inter-specific)、つまりヒトであれば文化が異なっても分かり合え文化間的(intra-cultural)になり、最後に音とそれの表す意味の関係が、恣意的つまり文化内的(intra-cultural)な約束に基づいている領域になるわけです。

他の種との関係で、ヒトの立場を考えると、アンソロポ・セントリズム、ヒト中心主義は考え直されなければなりません。神が自分の姿に似せて人間を作り、他の動物を人間の役に立てるようにお作りになったという、創世記パラダイムと私が呼んでいる世界観が西洋には根本にあって、それにテクノロジーが結びつき、近代ヒューマニズムが生まれた。この近代ヒューマニズムが、いま危機に瀕している。

尾本 ご承知のように、ギリシアの昔から、「ニワトリが先か卵が先か」という議論があります。プルタルコスっていう人が紀元1~2世紀に『食卓談義』という本の中に書いています。彼らは食事しながら雑談として、現代生物学の重要な問題を議論したわけですから、恐るべき文化程度ですね。現在の遺伝学で言うと、ニワトリは「個体」で、卵は「遺伝子」です。生物は形質と情報から成っている。個体は計ったりすることができる。つまり形質です。ところが、遺伝子は情報です。設計図という言い方をしますが、設計図というと、みなさん何かこう、紙が一枚あるような気がするみたいですが(笑)これは情報です。遺伝子(DNA)を情報として捉えることができるようになったのが、1953年のワトソン・クリック以降です。

遺伝子は、自然が決めたものだから、そう簡単には変えられない。しかし、我々が直面するさまざまな問題、例えば、差別の問題は、文化があるから出てくるわけです。遺伝子には差別はない。人間が文化というものから離れられない存在である以上、気をつけないと偏見や差別から免れる事ができないということです。最近でした

「先住民族と人権」という論文に書きましたが、区別と偏見と差別を、私ははっきり使いわけています。DNA分析から出発して、文化というものを見る場合、まずそこで区別・偏見・差別という言葉で、自分なりにきちんと理解しておかないと先に進めないのです。区別イコール差別だという議論がありますからね。男女を区別することも差別だということになってしまうと、自然科学はなりたたなくなってしまう、結局文化・社会科学との連携もできなくなります。

今回のCOEのテーマはまったく新鮮でそのこと自体が非常に大事なことです。日本の社会科学、文化科学を世界の中で捉える、全人類という立場で捉えるということは、非常によいと思うのです。問題は自然科学との連携です。クラスター分析のことで出てきたように、表現法が問題です。自然科学ではおのずと尺度が決まっている遺伝子のような場合、表現法もおのずから決まってくるのです。ところが文化のほうは、まだ本当に科学的に誰にでも納得させられるという表現法が、少ないような気がするのです。

川田 問題意識がなければ、山のように資料があっても紙屑にすぎない。問題意識をもち、問題を立てて、初めてそこから体系化も芽生えてくる。「人類文化」という視野は広大で現実離れしているようですけれども、現実の問題に対して近視眼的でない見通しをもち、未来を考えて行く上で大切です。ただ、そうあるためには、日々我々の社会におこっていることに注意を払い、問題を考える姿勢が必要です。中世史学者マルク・ブロックが、歴史学者はたとえ中世を研究していても、現代社会に起きていることに生き生きとした関心を持たなくてはならないと言っているのに心から共感します。それは人類学者でも同じで、社会との関係はなによりも私の学問を通してですが、同時に、自由な論調で知られる『信濃毎日新聞』の時評コラムの定期執筆者としても、イラク戦争や靖国問題も含む現代の問題に発言することを通して、ささやかでも現実にコミットしてゆきたいと願っています。

(1) 尾本恵市・川田順造・佐原眞(鼎談)「総合の「学」をめざして：新エイブ会の提唱」、『創造の世界』1997年秋号、No.104、小学館：82~109頁

(2) J.KAWADA *The Local and the Global in Technology*, UNESCO World Culture Report Unit, Paris, 2000.